

私はこう  
考える

カリキュラムは  
だれが作る？

## 保育者の「表現」としての計画

矢萩恭子

(田園調布学園大学)

保育の経験を記録することから生まれる

以前勤めていた幼稚園で教育課程の見直しに取り組んだ際、保育記録を書く行為が急に楽しく思えたことを思い出す。普段は、週や月の振り返りや打ち合わせを行う時以外は個人で行っていた記録だったが、その時は、仲間と共に、子どもたちの園での遊びや生活を見直す作業をある期間集中して行った。一日の長い時間を共に過ごす同僚たちと、子どもたちの姿についてじっくりと話し合える時間は貴重であった。また、一年前、二年前の子どもの姿に

まで話が及び、子どもの実態から浮かび上がる、発達する姿の不思議を改めて実感させられ、一喜一憂したことは今さらながら楽しい思い出である。

その時に初めて、記録することと計画すること、自分自身の保育とその園の保育とが自分の中でつながったように感じた。一つひとつの保育の、中身に関して、なぜこのような環境や遊びを用意するのか、どこからこの時期のこのねらいや内容が生まれてきたのか、なぜこの時期にこのような行事を行うのか……。それらが発達の理論や先輩保育者たちの長年の経験の踏襲ありきでつくられるのではなく、実際

矢萩恭子(やがひやすこ)

田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科准教授。

『保育者論—共生へのまなざし』(同文書院、共著)ほか。子ども自身の発達の体験や保育者間の協働と省察過程などについて実践に学びつつ考えています。

の子どもの姿に向き合う先輩保育者たちの、子どもや子どもの育ちへの理解や願いが積み重なる中から生まれ、つながってきたことに思い至ることができたのであった。そこに、自分たちの保育に向き合う保育者たちの理解や願いを新たに「表現」して入れ込みながら、今ここのでの保育の形を探していく。

すべて、もとになっているのは、保育者それぞれの子どもとの出会いであり、子どもや保育に向き合う姿勢である。そうした小さな経験を地道に言葉に表現するところから計画が生まれ、子どもの育ちが紡がれていく。

### 学生の学びに寄り添う

保育者養成校の教員として、授業や実習指導を通じて、指導計画や指導案のことについて伝えていく機会が多くあるが、この一年半は特に「総合演習」というゼミ授業においてその方法を模索してきた。つまり、実際に二歳児保育室という形の保育実践の場を用意し、学生たちの実践力を育てることに取り

組んできたのである。開設や運営の詳細はさておき、ゼミ生たちの学びに寄り添いつつ、自らも模索してきたことから、その難しさを挙げてみる。

まず第一に、保育直後の反省会で、一人ひとりの子どものその日の姿を振り返りながら言葉にするこの難しさである。それは、何をしていたか、何があったかの断片からだけでは、なかなか見えてこない。そこにいた保育者自身の援助やかかわり、感じ方も含めて語られる時、ようやく生き生きと息づき始める。初めは教員が率先して語り、学生保育者が語りだせるようになる時を待つことが続いた。

次に、前の回の反省を活かして次回の援助のあり方や保育内容を具体的に構想することの難しさである。例えば、絵本を読む場面で、子どもたちが落ち着いて集まるようになるためにはどうしたらよいのかといったことである。子ども自身が経験することに対し、保育者自身が何を願い、どうあることを目指すのかというふうに考えるまでに苦心し、一人ひとりの子どもへの理解をもとに次回の環境設定や

保育内容を話し合うことに遅々とした時間を要することとなった。

そんな手探りが続く中、事態が変わり始めるきっかけは、やはり子どもたちの姿であった。三週間に一回程度の不定期な保育室に、それでも楽しみに通ってきてくれるという子どもの思いや、わが子の名前を呼んでもらえてうれしかったという保護者の方の直接の声が、出会いの喜びを実感させてくれたのである。書式を学生に任せて毎回作成することを求めた指導案も、義務感から空疎な内容が目立った初めのころに比べると、反省や経験を活かした内容に少しずつ変わり始めてきた。何よりも、子どもたちや保護者の方々の力を大いに得ながら協力して一つの保育の場をつくり上げる醍醐味を互いに味わえたことは、大きな収穫であった。

### 計画と記録の中間にある指導計画

対談を読んで、計画するということは保育者の表現であり、この保育者の表現としての計画を残して

積み上げることで子どもと保育者双方の育ちが見えてくるという最後の戸田先生の言葉が印象に残った。学生にも保育者の「表現としての計画」をぜひ実感してもらいたい。そのためには、子どもたちの生き生きと遊ぶ姿や、保護者の毎週開催してほしいという希望に目をつぶりつつ、実践後の反省から次の保育を具体的に計画し、準備して次の実践を迎えるという保育のプロセスは欠かせないと感じている。今後も、語り合い、表現し合い、そして感じ、考える豊かな保育の場を、学生と共に目指していきたいと思う。



注 矢萩恭子「総合演習授業における二歳児保育室の実践

と課題「あそびば『ぼこあ』」の開設を通じて」

全国保育士養成協議会第五十一回研究大会二〇二二年九月